

不能にならう一般の期待を裏切った形になった故に感情的な処もあるが一面私が米軍引揚げ直前兩村代表者間の協議に依り又米島々長に推されて政治的にタッチした影響もあろうと思われぬ。河札にしても誠実と正確さかの不正もない良心的な仕事に対して全く逆の取扱を受ける憤慨もする。淋しい氣持もする。私は此の空気の途中で

誠實にこの矢の立つみ

たとへ罵しゆる人の居てん

と拙い作らこんだ琉歌をつくって心の拠り処とした。私は機会ある毎に郵便局の仕事に疑問を持つ人が居たら何時でも申し出て来る事を希望する。関係書類はすべて保管されて居るから充分説明して上げる旨話したが元々感情と策謀から出発した者に誰一人として正々堂々と私の許に説明を

求める者はなかった。

結局此の非諒は、一大嘘に吠えて万々に和すの例に過ぎず。私の憤慨の氣持は輕蔑に変わり寧ろ隣みにせえなされた。私は自ら進んで具志川村々会議員の集りの席上に之に参り扱った金銭関係書類、証書類、會計諸帳簿等を持参して彼等に調査を依頼し調査の結果に依り無智の者達の誤解を解く事に協力して貰った。

日が立つにつれて私は一つの信念が出来た。それは今までの反感はやかて判る時が来る。事務引継の場合明白になる事だ。反感が大きければ大きい程却る吾々の正しさを美しい姿で証明されるのだとさう自信に変わった。私がこれまで局長会の都度、建議事項として「戦前の貯金保険等の早期拂戻し方盡力相成度」と提案したのも

イ 自分の仕事の結末をつけ。

ロ 預金者の生活苦を打解し

ハ 通信事業に対する信頼を保ち

ニ 預金者に対しては私個人が債務者であるかの様な心の負担もあるが一面前記の様な苦しい事情から早々抜け出し度い氣持も手傳つて居るのである。私は一日も早く事務の引継ぎと貯金保険等の拂戻の解決の着く様念願して止まらぬ。

### 光は東から

こうした数年間の重苦しい心の負担も遂に報いられる日が来た。

一九五二年三月、日本郵政省からマツカーサー司令部の指令を受けて青谷野上大前事務官が戦前の郵便貯金保

險年金等の調査のため来琉された。光は遂に東から。

調査官一行の来琉を機会に私は一応戦争中の局務運行

状況を報告した後、戦争中取扱った未発送の印刷日報等金

銭関係書類を四月二日郵政廳へ於て野上事務官に引き継ぎ具つ

一 敬重なる調査の上其の結果を何等かの方法を意志表示して

下さる様御願ひした。我々は当然つくすべき責務を盡したまふ事

は解決と自分及び部下の名誉をから得たいという深染心からではない。

これまでの誤解を完全と解消せしめ併せて通信事業成信を日印

揚ごたい念願から要請である。

貯金保険等の押戻しの見透しはついた。気がかりであった未発送の

会計書類も引き継いだ。これまで戦前の貯金保険等の押戻

しかつながらの疑念を拂つて居た一部民衆或は半ば諦つて居た人

達にも之がはつきりしと明るく空気が漂うて来た。行を逢う人々の顔を

50  
見て私自身が明らかなら。これ一般の誤解を解け、預金者への  
義理も立つ。誤解は信頼に及び、之から発足する貯金業務も何等  
の慮意なく力強くスタート出来る。

思えば昔、教員だったのが之にも軽く気もなかつた。私は今責任を果し  
得る喜びの溢れに、戦は負けても正義がくじけ下りたものではない、事を  
よくと感ぜよう。

伊江島の戦記(一部分)

開戦直前の島の様相

一 飛行場の建設

一九四一年(昭和十六年)十二月八日午六時空襲時大東亞戦争の  
直戦の詔下るや日本の陸海空軍は一気に真珠湾、ビルマ、  
フィリピン、ビルマ、ミンガポールを占領し、続々とセビスタン、  
ジャワ、遠く南太平洋中のチモール、ソロモン群島を征服し、濠洲  
にも進出したので南方作戦の空軍中継基地として沖繩本  
島に於いては小禄読谷、嘉手納と共に伊江島にも飛行場の  
建設が企図せられたのである。

一九四二年(昭和十七年)の八月、少佐佐外教名、係官が来村せられ  
直ちに美地踏査、トコヘズ山の西側ソド池との間に奇越よりブリ  
に跨り延長二ハ、米幅負三〇米と決定され、測量、土地買  
取と順々に進み之を固場地に請負はしめ、工事に着手した

は

のである。本場地は県下各市町村から作業人を徴備し一日  
平均二五〇人の従業員と三〇〇台の荷馬車を使役したのみ、其の  
食糧を補充するため甘藷、野菜、味噌等の供出が伊江住民に  
課せられた。出来得る限り協力を各まなかつた。だが食糧の補給  
難と棒と各に依る上、運搬作業であるため、工事は遅々として進捗  
せず、又月日を重ねるだけであった。飛行場は更にA型に擴張せら  
れ、竣工した。それを西飛行場と命名された。

南方に於ける戦況の急進に伴い、飛行場の急進を完成と増設  
が必要とされたので一九四三年(昭和十八年)七月には遠く満州の二個  
大隊(田村隊)が移動して来て飛行場設定の任に當り、ゴズ山の東  
側に西飛行場と平行して同面積の飛行場が建設されること  
となり、これを東飛行場と命名し、軍直営の下に工事が進められた。  
伊江住民は東西両飛行場建設より三〇町方の農耕地は潰

これ各種作業に従事するたの夜業に勵む暇もな、とうたつた  
けれど戦争を勝ち取らばこそは一人の不平等なく軍に協力しな  
かった。

### 二 守備隊の駐屯

戦争は愈々激烈となり沖繩防備の重要性が増大したため練部  
隊派遣となり伊江島には昭和十九年三月頃一個大隊(西村隊)が  
守備の任に當り駐屯することになった。西村隊長は敵の空襲に備  
えたる塹壕の構築、砲臺の整備、竹槍訓練等伊江住民の  
可働者を集め、兵食と共に作業に従事せしめた。そして村内各所  
全部に旦り納骨を授けて空襲に備へ、尚戦争に不足するたる老  
幼者の沖繩島疎開を促進せうたため住民は採るべき途に迷  
い大騒ぎをした。向もなく西村部隊は、この方面に駐屯し井川少佐の  
率いる歩兵一個大隊及連射砲隊(諸江中隊)独立榴霰砲中隊

が駐屯すことになり西村隊同様塹壕の整備を急ごうであった。  
尚其の外に県下各市町村の花柳軍人を召集し一個大隊を編成しそ  
れを防衛隊と称し駐屯せしめた。其の大隊長は屋部村出身の  
直保中尉であった。

### 三 食糧の確保

日本軍は豫てより沖繩戦を予想し長期作戦、備の食糧  
確保に兎壁を期し、食糧補給に重きを置き軍民ニ公平  
分の食糧を確保し各所に民家を借り受け山積するた。塹壕  
と墓場は殆んど食糧と弾薬の貯蔵場となった。然るに住民  
はもよりの配給制度なうで食糧は依然として不足がちであった。

### 四 物價の変動

飛行場を急遽に完成すべく昭和十九年八月佐藤少佐の率い  
る一個大隊が増援され伊江村はさながら兵隊町と化し、いつの間か

インフレを招致し、村内の経済は一変し、諸物価格は定価の倍を  
ふれ、五六倍に騰騰貴すようになつた。

### 五、他府県への疎用

昭和十九年六月、沖繩軍司令官及沖縄県知事は字重並に  
婦女子の日本疎用を命令した。それより戦争状態が不安定内の  
住民は之に應ずり村々守備隊長、敬告、強制的に同年  
八月に漸く二六。余人熊本宮崎への疎用者を送り出す事かた  
た。疎用民は統々那覇に集結した。乗船途中情勢が悪い  
為避難すまか、或は航行中、敵潜水艦の攻撃に遭ひ沈没したり  
等して相當の犠牲者も統々出たけれども幸にして伊江村民の疎用  
者には別に何の異状も無く目的地に達し得た事は実に感慨無  
量である。

### 六、飛行場の完成近し

酷暑盛夏の別なく日・去より日没まで少量の食糧にたえ忍び  
軍民協力の結果東西両飛行場の完成近くなつた。其の頃今平  
九月台湾沖海戦に参加の戦艦一。まが飛来して中能給油を  
なした。其・本発に際し田村隊長は責任の重大さに感涙塔来自  
を集り、激励の訓辞を以つて餓えさせたけれども飛が立つて行つた。一  
の一枚だに還らず遂に消息不明となつた。

### 七、十空襲

南方に於ける戦闘は甚奇烈となり日本軍の不利に乘じて米軍は  
沖縄を領し企図し、昭和十九年十月十日未明から沖縄本島を襲  
うた其の一隊が伊江島を祖い手始めに飛行場を爆撃した。統々  
交通機関たる船舶(盛子丸)に島丸)を航行不能に陥し、通信  
網を遮断し四十余人の人命を失つた。空襲中、軍民は壱壊洞  
窟を避る。墓の中等に避難し千石に至り敵機の姿が見えざるを

待つて空塔の溜息をついた。それでも軍民は消滅せず益々敵愾心をふる、おこし書夜兼行飛行場の復旧に躍起活躍した。

八、今帰仁への疎開

フィリピンにありつた空軍の全滅によって日本軍は愈々敗となつて沖繩方面が戦場となる事は火を見らるり明白となつた。首里那ハ島尻中頭住民が国頭方面へ疎開を命ぜらるると共に伊江住民は今帰仁村宇平敷から西側の各村落に割り當てられ疎開す。事となり軍用の舟艇及割舟を本部今帰仁へ往來が頻繁となつた。

九、第三回空襲

昭和二十一年一月二十二日第二回目の空襲を受け飛行場を始の村内の重要建物を使用不能となり人畜の犠牲も相當であつた。今年三月下旬日本軍は益々攻勢の収め自からの予を飛行場の破潰作業を決定した。それを探知した住民は益々恐怖の

念とからい別舟で本部今帰仁に逃げ去る者も夥しく人心は

動搖し村役所の機能も中絶するに至つた。今年三月二十三日未明

敵機大編隊が飛来し焼夷弾の雨を降らし、部落内は猛火の海と

化し人畜の被害更に甚大であつた。それ以来軍民共に生気を失ひ

晝は塹壕や洞穴に潜伏し夜間には出て食糧を求めらるる本部

へ逃げゆく舟をさかすまう右往左往その採るべきすべを知らなかつた

敵の攻勢は益々激化し空襲は毎日続行し無数の艦船が沖波

本島を圍つた断なく砲臺を加えた。嘉手納附近には敵が上陸

したとの報が伝わり読心するは白兵戦酣となりその知るかもたつた

同月二十八日午後三時頃には伊江島も残波沖の艦船が益々砲臺

を度けたので夜間に於ける水も補給炊事等も困難となつて生米を

啗む状態になつた。益々海からの爆撃は三週間余書夜間断なく

続行し伊江島全域に亘り一米平方に一弾を射込んた程で其の



向野壕や洞窟に居た軍民は日光を見ざる事なき食に飢え水は無し栄養の保持困難となり刺へ空気が如く如くわき子供は泣き叫ぶといふに不気味な日が続いた。斯くすゝ内に直裏砲うたれに壕は崩潰し窒息して死す者あり逃げ迷う向に路上で散死せる者あり沖濃木島に逃げ去るたの舟を潜りましたけれど海で射たる者があるなどその慘境たる光景は筆舌を以て表現する事は出来ぬ程であった。

## 二 戦斗実記

### 一 敵の上陸

敵はよく上陸体制を整え海浜近く舟般の姿を現し海底の測量の上陸地先の選定等を行ひ昭和二十年四月十六日押尾浜地新波止場、ナカラ浜、ハテ浜、小浜の各所から戦車隊を先

頭の上陸を決行した。日本軍は空爆や砲撃で甚大な損害を蒙り各隊の連絡は断れぬ食糧補給も困難となり既に戦意を失ひ、目赤に迫る敵の上陸を目撃しながら一弾も射たらず野壕や周章狼狽するのみで敵は悠々無血上陸に大成した。小浜、ハテから上陸した敵は直ちに飛行場を占領し戦車隊は盛に日本軍陣地を砲撃し、ハテ附近に集結した。翌十七日日本軍連射砲隊は一斉射撃を敢行し、ハテ原方面から迫る敵戦車隊と交戦す。三時間余りに及び相當の損害を与えたけれど砲身焼け射撃不能となり陣地は敵弾に潰され無力となった。そこで敵はますます猛威をふる、赤峯方面から城山陣地めかけ砲撃を開始した。

新波止場から上陸した敵は川平、西赤正域を掃蕩し新校舎に陣取り浜地方面から来た敵は東江前、東江と迫った。

そして敵作業隊は飛行場の修復に果命となり上陸後三日  
目の四月十八日の午後には戦平松の着島陸をなす事か出来な  
らうになった。

「説」右、新校舎并伊江島本校のこと。城山陣地とは各部隊の本部  
陣地のこと。

### 二夜襲撃行

日本軍は夜襲を企図し残り兵員は少年義勇軍と婦女子を加え  
急造爆雷、手榴弾、小銃等貧弱な兵器で夜襲を敢  
行し敵は多大の損害を蒙るに成功し兵器と物資を敵に奪  
兵員に討し日本軍は只敗れぬのみであった。だが日本軍は僅か  
に残る兵員と傷つて居る者集合し互に討舞しあつて一周間の夜  
襲を続け残り一兵に至るまで戦い抜き遂に護国の華と散つた。  
斯くて四月二十二日には新校舎屋上から国旗が掲げられ廟を

飛つた。

### 三、夜で沖繩本島へ

日本軍将兵の中には伊江島戦斗には敗れたけれど沖繩本島に  
渡つて奥部山に在る宇土部隊に加わり戦斗に参加せんとする軍人精  
神に燃え、五六人位を組ませ海兵隊に漂流せる木片を組ませ粗  
削りの筏を頼りに暗夜に乗じ大海に滑り出した者があった。ところが怒  
濤に吞まらる者があり潮流のたぐ逆の方向に流される者があり敵陣に射  
たる者があったりして大失敗に終り目的地に達し着き命捨てる  
た者の数はほんに僅少であった。伊江東江と巨城清菜君は此の  
島救を体験した一人である。

### 四、住民の自爆

住民は洞窟に在りて敵の上陸を知ると全く生氣を失ひ敵に反抗  
して射殺される者も居た。或は敵に被害せしめるより早と氣の早、

者は銃劔・手榴弾・農具等を家族を殺傷し、銃にて自  
害する者も居た。かゝるにして一家全滅となり、南くも哀かな犠牲  
者の相当地数ありた事は実に遺憾である。

### 五 官機工作

伊江島は日本々土攻襲基地として米軍は、戦中も飛行場の修  
復・擴張・又は新設に奮勵し、そのためには住民の官機工作の  
四月十六日と陸早々燈台南側の洞穴に潜伏して居る金城久波  
知念十太郎、知念賀助の諸氏を誘ひ、おいて彼等を道案内者  
として、ついに潜伏して居る住民を集めて、その原に十数棟の幕舎を  
建て、收容し五月下旬には二十人を突破した。西江正の知念鎌太  
氏を班長に命じて炊事・衛生・作業、敬言官等の係を置き住民の保  
護をさせた。炊事場は一食一握(約八勺)迄配給し可働者は作  
業に動員した。作業者は煙草・缶詰・菓子等の戦果を得た。

の喜びんでお動した。

### 六 村長の最後

戦争当時の伊江村長は真采里豊三氏(六三才)であつた。同  
氏は井川部隊本部に在りて常に兵負を勵まし軍に協力されて居た。  
そのく、四月二十日には白鉢巻姿で手榴弾を握り、壮者を凌ぐ  
元氣で本校附近の夜襲に参加せし隊に戦死をとげられた。

### 七 鉄風と散る花

真采田節子(23)大城ハル子(24)大瀧壽美子(26)永山ハ生(26)  
崎波ヨシ子(27)この五人は井川部隊本部附を命ぜられ負傷兵  
の看護に當り居たが既に死を決して居たこのうち乙女は黒髪を  
刈り、洛し軍服・軍帽・帯劔姿に巻脚絆・編上靴、すかり服  
を男子にかえ、爆雷を背に左手にはマシンを握り、四月二十一日午  
二時頃井川部隊最前より夜襲に加かり、備方副官に附添い

新校舎南側の敵戦車に奇襲した。物凄く爆音と共に戦車は燃坐せしめられ、可憎青春五石の花は満き、銃火の中に木葉微塵と散り去った。

三、空襲其の他、日記抄(伊是名正信氏日記帳より)

昭和十九年中

昭和十九年一月十七日——伊江島飛行場は愈々重要性を帯び其の建設を急がねばならぬ事となり今日から各戸一人以上奉仕作業に専ら事なつた。村民は喜んで其の作業に従事した。

昭和十九年三月五日——戦争を勝ち抜くには是非国民の貯蓄を強調せねばならぬ事と最近郵便貯金が激増した。昨今郡(国頭郡)貯蓄強調間なので郵便局は貯蓄事務に忙殺されて

昭和十九年四月二十一日——飛行場工事場行きの人馬の多し、馬車、荷車

の目本学校附近におまた日本軍炊事場の雑沓に自分の家のありは千赤三四将項かうごったかえして、昨今である。

昭和十九年四月三日——飛行場の工事関係で西上の全部、西下部落の一部が立ち退きを命ぜらる日本軍部から命令を発せられた。

昭和十九年五月二日——都合に依り赤記立退き命令は取り消された。

昭和十九年五月三日——山敷の松の立木が日本軍の用材として盛に伐りたおされている。

昭和十九年六月五日——空襲被害報の発令がある(後で解除)

昭和十九年六月二十九日——物資欠乏に困る様になった燈用石油等も無く、山羊の油をこれに利用して居る昨今である。

昭和十九年七月九日——本日の学集会で重戦局に対する各種事項の伝達があった。

昭和十九年七月十日——新南は再度の北九州空襲を報じ人心不安の

能心である。

△同年七月十五日 日本軍部より重大事件を申し渡された。

それは伊江全島の墓所全部を軍に提供せよとのことである。

村民は非常な敵意をこめて心配した。

△同年七月十三日 昨日の革命を果すべく村民一同本日各自

の墓所整理に大馬力をかけた。そのために本年の盆祭は行事

挙行困難になった。

△同年七月十七日 村民を集めて部隊長は次の注意を述べた。

一 戦局は日一日と切迫し敵は何時攻め来ふか知らぬか。昨日決

心を固めよ

一 年暮り子供は村外に立ち退く事

一 男子は全部竹槍を用意すべし事

右の伝達で村民は大へん心配したが部隊長の次に中隊長が「大

東亞戦争は日本が必ず勝利する」といふ言を村民は不安の胸をなだめた。

△同年七月十八日 村民一同防空壕掘りに大馬力をかけた。昨今で

ある。

△同年七月二十日 「カイパン」島玉砕の報つたわり人心不安。

△同年七月二十四日 東條内閣総辞任の報に接し此の重大戦

局に内閣の総辞任は如何なる事かと心配した。

△同年七月二十九日 役場に掲げられる戦果報告を見て三〇人とい

たに此の頃は如何の報告もなく戦局に対する不安、淋しさを更に

やませぬと思ひをさせうけら昨今である。

△同年八月一日 疎開問題で人心不安の状態である。

△同年八月十一日 村では革命の命に依つて防空を演習に参

加する事となる午後五時半から壕入りの練習をした。演習終

了俊村民一同に對し西村部隊長のお話があった。  
演習の成績はおほむね良好であつた事

(1)是非老人子供は疎開せよ事  
右のお話があつた後村当局かう疎開について具體的の説明があつた。それによつて國の經費で伊江島かう約千四百石程

熊本県が宮崎県に転出せよ事であつた。  
△同年八月十三日疎開者の郵便貯金押戻に局は大多此を極めて居る。

△同年九月二十三日村内住家の比較的なるものは殆ど全部が軍部  
の英舎に使用された。東江と、糸山耕基君宅は西村部隊長  
の宿所となつた。

△同年十月日日本軍部では今日かう大きな柱杭を据え付け、  
現在の飯場前(学校敷地)に井戸掘りをはじめた。

△同年十月六日小越森附近に日本軍が陣地をつく、昨今田村部隊  
が盛に壕掘りを行つてゐる。

△同年十月十日大事件が起つた。朝食の折敵艇未離れの声がある。  
注意すまじい爆音がきこえらる。胸をおさえて敵艇を所を壕に  
入れ自分はその間に取場へ出勤した。家の門を出る頃には既に  
敵艇は島近くまで見えた。「メニがミラ」を附近を行く頃には既に  
敵艇から打ち出す機関銃其の他の重砲音が島に包まれて居た。  
石垣の側、木の下のあたりをどつ、辛うじて取場(郵便局)に着た。  
干草の藪裏で飛行場は相當の被害があつた。盛の丸も  
とつた。敵艇が去つた折に見はかう、対岸の本部村に見たら  
瀨久地港が大火災を起して居る。瀨底島の方面にも盛の煙が  
立つ。一時何ともいへぬ不安の念にかうれたが萬事は天運に任  
すべく意を固めた。千後の龍衣裏の折弾が家の馬屋のなか

に落ち其の破片で台所の戸を打ち破り器具をこわしアール  
を射殺し壁や天井等弾痕目もあつた。お程であつた。それ  
も家族は壕の中を免れた。家の附近には兵隊さんが数石  
負傷し一人は戦死した。お隣の「村元の屋」のおばさんが弾に  
あつて負傷した。学校のカラリートの建物は弾痕で見られ  
たましいお女になつて居た。おはやく始めて見る実戦の光景さうで  
悪夢を見ている心地であつた。

△同年十月十一日 敵艦に対する防衛策を考へて一日は過  
た。不吉、不吉

△同年十月十二日 昨日同様常に注意を拂つて二日経過  
△同年十月十三日 午後四時頃空襲警報が出た。今度こそは大  
爆轟だと細心の注意を拂つて居たが、とうとう晩方には解除に  
なつてしまふ。

△同年十月十四日 朝友軍艦が沢山島の上空を飛んだので島民は大  
いん喜んだ。空襲下で應召で島を去る青年を見ていたま  
しい思ひをした。本部郵便局が全焼し郵便物の焼着不可能だ  
右護三高女在学の際に家族の名字を知つた術もなくなった。  
敵の空母艦十六の四十一は東沈したといふ話。日本将校からさか  
さか大いに喜んだ。

△同年十月十七日 兵隊さんのおれおれも飛行場作業人夫の  
おれおれか甘炭畑が随分食べ荒うおれおれ。

△同年十月十八日 十月十日の空襲後三高女の生徒は各自帰宅す  
るようになり伊江島・瀬底島お身の生徒のみか、まだ本校に居  
残り引取りの父兄の来ぬのを待つて居るとの伝言により今日本校生  
徒の父兄相談し引取りに行く様相談を纏めた。

△同年十月二十九日 日本軍は「ミニミニ」に築港すべく大馬力

をかけた居る真最中である。

(一) 昭和二十年一月一日より今年三月二十六日まで

△昭和二十年一月一日 元旦の拝礼を本家親類の家へ行つたが本家の山越の日本陣地には各所に壕が出来、赤山の家、伊是石勇明の家は軍部が宿所になり昨年に此に變り果ては光景に心をいためた。元旦早々空襲警戒報があつたが午後解除となつた。

赤山の家では諸江隊の演習会が盛大に挙行された。

△同年一月四日 今日空襲警戒報があつて人心不安の状態である。石護読谷附近に敵機が来たという噂が盛に伝えられた。

△同年一月二十二日 二回日伊江島大空襲当日であつた。美にあつた。日であつた。早朝から敵機が来た。美にあつた。空襲だ。ラッパの音に家族全部入りけし。壕は銃と雨水が溜り空相を要且して其の上に居たのである。しばらくすると

すい音を立て敵機が飛来した。機関銃掃射の音で島を包み込んで暴れ狂つた。午後の三時頃又もや敵機がやってきました。千代比の美に猛烈な勢力をやつて来た。島の上空に現れた敵機はまたかう群れ飛ぶトンのようであつた。壕の中を叩く敵機の音のこの美に身ふるふる程で、いまだ心地はしなかつた。敵機が去つて壕を去るみると家はすかり破壊されて居た。豫想外に破壊されていた。

全潰同様で屋根がう壁、戸、屋内の諸道具、その水も目もあつた。うねり惨状であつた。斯く被害を受けたのは家の後方十字路に五〇〇ギロ(う)爆弾が投下された為であつた。屋内に入ら事は勿論不可能になつたので比較的完全な大瀧家の壕に行つて合体することにした。

△同年二月十六日 戦局は益々重大化して伊江島も大戦場になるかも知れぬから六〇ギロ以下四〇ギロ以下の者は疎開するようになり革命によつて村当局は村民通達を發した。晩方敵機一機島の西端に飛来



シ降伏せよとのビラを散布した。

△同年三月一日 第三回日、伊江島空襲があった。朝の七時頃、遠雷の響きかすと思つ間もなく敵機が来襲した。物すごい爆轟は朝かう午迄三時頃まで続いた。各所に火災が起り伊江島は火の海と化した。農業組合書記具志堅玄九君が姉と共に自分の壕の中を爆死した。

△同年三月六日 軍より、布告は物すごい文句で危切の疎開を勧めた。一革命に依る疎開に従わぬ者、首には三尺の秋米が飛ぶぞ、という指示も出た。戦局は如何になり行くものや最悪の場合を考へると実に情けない感じがする。

△同年三月十日 事務(郵便局)は疎散があった。レカン疎散せよといふ程戦局に對する不安の念は何やかと色々のことを考へるに、何とも言明し難い、昨今の心境である。邦家の来よんれば如何

ともする事は出来ぬ、又人事を尽して天命を待つより外致し方がない、あゝ、いつに平和の日が来るものやう。

△同年三月十九日 戦局は不安を感ぜしめ、一日三回ずつ非令である。

△同年三月二十三日 又りや空襲があった。各所に火事が起った。アラ道通が猛火に包まれ農業組合倉庫「ミラシ」食堂等も焼失した。

△同年三月二十四日 昨日日比軍曹が注意をよせた通り今日も押戻から空襲があった。

△同年三月二十五日 空襲が暮れる非令である。爆音がある壕に潜み、それか去ると壕を去る所をなすことほなく、又ぶらぶらするのみである。次に住む獸の生活を続け、居る精神上の心配、食糧の不足を時折フラ／＼することもある。

△同年三月二十六日 島にいたまは十三夜、九時頃、獨木舟で本島と渡る事にした。航行中に小舟の舟を敵機が飛んだので、最

18  
信だと覚悟したか弾はうたずじまに過ぎ去り「ホント」した。夜の十一時  
頃、浦崎の浜に着いた。其の折、振り返り島を見ると照明弾が  
島の前面、浜辺は登りように明るかった。始めに見る照明弾は肝  
をうぶした。島から本島へ独木舟で渡る事の出発はあやう  
く自分達が最後であったと思う。 ぬ、伊江島よ。

